

# 「もうひとつの生活技術論」としての民俗学

——都市民俗学と経世済民——

小林 忠 雄

- 
- |            |               |
|------------|---------------|
| 1 都市民俗学の前提 | 3 もうひとつの生活技術論 |
| 2 伝統都市の民俗  | 4 都市民俗学と経世済民  |
- 

## 論文要旨

近代以降の都市には都市の環境がつくり出した新たな民俗がある。これをとりあえず「都市の生活技術伝承」と仮称すると、例えば金沢などではワリイケ（割り井戸）とかタイナイクグリといった事例がある。都市民俗学が問題とするのは、都市の住民の移動や稼業の盛衰が著しいために、ムラ社会と違って伝承母体が分立しているために年中行事や民間信仰、俗信といった民俗が個々に展開している。従って、都市が経済の修羅場で、市場の論理を貫く所であるとするならば、人より先んじた情報や世間話が重要となる。

1970年代から E. F. シューマッハが唱えた、近代の巨大技術では捉えきれない「もう一つの技術」がヨーロッパのコンセプトを支配した。これを都市民俗学にあてはめると、地方都市における独自のライフスタイル（生活技術）の在り方が模索されるであろう。

単なる町起こしには問題があるが、例えば、かつて各地で生活の合理化によって失われた町名を復活しようという運動においても、町名を科学する姿勢がなければ問題であり、そこには民俗の変容をさぐる意味での都市民俗学の在り方が考えられる。

最近の新聞情報によると、都市や近郊農村の家族事件として親の子殺し、登校拒否、家庭内暴力等々があげられるが、そこには俗信や新興宗教のトラブルによる原因のものが数多くみられる。さらに、老人の「ぼっくり死」願望などの流行現象においても、その背景には巨大技術社会への混乱と、社会の抑圧に抗しきれない弱者の精神的破綻、あるいは共同体社会の崩壊といった要因が見え隠れしているように思える。

柳田國男が意図した経世済民の学として、今日の民俗学がどれほど役にたっているかは疑問だが、都市が人工的になればなるほど、人々はよりナチュラルな環境や生活リズムを求めるもので、そのような社会的要求に、常に民俗学は答えるべきであろう。

## 1 都市民俗学の前提

私がこれまで都市の民俗として対象にしてきた、北陸の旧城下町である金沢の民俗事例のなかでも、以前から興味を抱きながら強いて触れてこなかった事象が二つある。

その一つはワリイケ（割り井戸）と称されたフォークタームの事例である。これは金沢の市街地でも北側に属する地帯にて、古くから職人や日稼ぎ者が多く住む旧七連区の名で知られたマチ中で行われてきたもので、かつて狭い地域に密集して建つ民家が、それぞれの屋敷内に一つの井戸（イケ）を持つことが出来ず、2軒の家が一つの井戸を共有し、壁でもって半分に区切って使用してきたという井戸のことである。

卯辰山の山麓に位置するこの地域は、地勢として井戸を掘るにはそれほど困難な場所でないと考えられるが、地元の話では、ワリイケのある家は少しばかり気恥ずかしかった所為か、ワリイケを使っていることをこれまで公にしなかったため、どこにどれだけの数があったのかは、ほとんど不明であるという。

ちなみに藩政期から明治初年にかけて、武家や大きな商家などの家には1軒に一つ以上の井戸があり、また丁内ごとに惣井戸（共同井戸）が設けられていた<sup>(1)</sup>。

しかし、明治中期以降は井戸の普及も増加し、例えば長屋のような場合は10軒に一つの割合で共同井戸が設けられていたといわれている。

従って、このワリイケの存在も、屋内井戸が普及しはじめた明治後期から、市の上水道事業が始まった昭和6年までの間に流行った井戸の形態と考えられる。

いずれにしろ、その当時は井戸を所持するということのステータス性が背後にあったことと、まったくの貧困の家では上水道が普及するまで、共同井戸に頼るか、市内を流れる犀川、浅野川あるいは用水の早朝の水を汲み上げ、屋内の水瓶に移して飲料水としていたことから、例え2軒で一つの井戸を所有したとしても、多少ゆとりのある家でなければできなかつたと思われる。

ここで、注意されるのは、このワリイケを外の人にほとんどしゃべることなく、密かに使用されてきたことである。実態としてどれだけの数が存在したのか、今や確実な数字を見つけ出すことは極めて困難な状況ではあるが、かつてこのマチのどこかにワリイケが在ったということのみは紛れもない事実である。

同じような事例がもう一つある。それはタイナイクグリと称されたフォークタームの事象で、ここではいわゆる「胎内潜り」の言葉を意味しているらしい。

これも、明治後期から昭和20年代まで見られた事象で、必ずしも明確ではないが、いわゆる長屋住まいのことを指すという説と、通りに面した大家さんの家をぶち抜いて、その奥にある長屋の住人が出入りした入り口を指すとの2説が存在する。

すなわち、金沢の旧城下町は明治初年の廃藩置県の後、武士の離散やその庇護にあった御用商

人の没落などによって、マチ全体が疲弊した時代があった。そして、武士の家や商家の屋敷地が次々と売られ、その所有者が入れ替わることによってマチの様相が一変したのである。

一つの説は、そんな頃、間口の広い商家の脇の家屋内の部分を抜いて通路をつくり、奥の空き地やセド（裏庭）に長屋を建て、賃貸契約で人を住ませたもので、表の通りから見れば長屋の住人が貸主である大家の家の胎内を潜るように見えたからであるという。

この事例も現在はただの一つも見ることができず、またその痕跡すら残っていない。

従って、その実態の全貌は、今日、もはや知ることもできないが、聞くところによれば、金沢全体に広く点在していたもので、そのような形態の長屋の在った周辺の人々のみが表現した事例であるように窺われる。

しかも、伝承の内容から判断されるのは、このようなタイナイグリは江戸時代には無く、明治以降のいわゆる近代都市の出現によって生み出され、後に消失してしまったある一定期間のみの習俗のようであった。

つまり、この二つの事例は近代都市社会の環境によって生み出された、住まい方の技術伝承なのである。そして、この事象は僅か数十年の間のみ機能したものであって、都市的環境が変化すれば、まったく違う住まう技術が次に取り入れられるという性格のものであった。さらに言えば、似たような事例は現代社会においても数多くあると考えられ、今日でも新しい民俗が生成しては消えといったサイクルを繰り返しているように考えられる。

しかし、よくよく検討してみると、このような事例は果たして「民俗」と呼べる性格のものであろうか。すなわち、民俗とは和歌森太郎の言によれば3世代を経て定着しなければならないのであって、仮に一つの世代のみに普及した生活事象に地域的なクォークタームが付加したものであっても民俗の対象とするならば、この際に和歌森の定義を見直さなければならないであろう。そして、風俗事象とも若干異なるこのような都市的民俗事象は、新たに都市民俗調査や過去のデータを洗ったならば外にも数多くあると推察されるが、我々はとりあえずこのような事象を「都市の生活技術伝承」と仮称しておこう。

ちなみに、これまで私が思考してきた都市の民俗学に関して、その概略を述べれば次のようである。

日本の民俗社会が今大きく様変わりしつつあることは、既によく知られていることであるが、現在日本の人口の7～8割が都市およびその周辺部に居住し、そこに住む人々はまったく都市的なライフスタイルを余儀無くされている。

この場合の都市というのは、いったい何を指し示しているのであろうか。これまで、文化人類学や民俗学では、この都市の概念規定を十分に検討し確認してこなかった経緯がある。従って、都市を扱う民俗学研究者は、それぞれが勝手に自らのイメージで都市を捉えているだけであった。

民俗学における柳田國男は、日本の近代化が進む中のかなり早い時期に、日本の民俗社会の変化すなわち都市化の傾向に着目し『都市と農村』（1929）および『明治大正史・世相篇』（1931）

を著して、様々な問題を指摘したことはつとに有名であるが、そのなかで柳田が明確に述べているのは「都市は輸入文化の窓口」という指摘であった。

つまり、このことは少なくとも日本の都市文化はまさに外国の影響を受けて育ったものであり、外来文化を混在させて形成された文化であることを意味している。

ただ、柳田がそういった輸入文化、すなわち西洋の新しい科学技術や情報によってもたらされた社会の変化と民俗の変化を同一視して捉えていたのかどうかについては、不明な点が多いので、今後さらに検討する必要があるだろう。

また、70年代の後半から民俗学においても問題とされ始めた都市民俗学への課題において、これまで様々な論議がなされてきたが、未だその研究対象や研究方法の有効性をめぐっての議論が百出している。

私の場合は、これまで竹田聴州氏が1975年にいみじくも提起した「都市にも常民文化あり」という都市民俗論の基本的な視点により出発したものであって、それは必ずしも近代化とは無関係に、農村社会とは異なった都市的というか都市独自に創出された民間伝承すなわち「都市生成の民俗」の存在に、この際新たに目を向けるべきであり、その存在を確認するという歴史学方法論を提唱した<sup>(2)</sup>かったのである。

さらに、柳田の『明治大正史・世相篇』は民俗学の目的の一つである「世相解説の学」足らんと欲したことは理解できるが、同時に民俗学のもう一つの目的である「経世済民の学」としての役割をどのように担うのかといった点では、今日の民俗学の現状とも相俟ってさらに考えなければならぬように思っている。

以上のことを踏まえてみると、まず第一に「都市生成の民俗」というのは果たして存在するかといった問題が考えられ、第二の問題である「経世済民の学」としての民俗学の在り方をめぐって、今どのような形で都市民俗学の課題と実践を結びつけたらよいかといった点に執着し論を進めてみたいと思う。

## 2 伝統都市の民俗

都市の民俗を考える場合、まずもってその対象となる民俗事象とそれを支えてきた伝承の母体が何であるかが問題となるであろう。

私はこれまで、北陸の旧城下町金沢をフィールドに上記の問題に取り組んできた。その結果、次のような基本的認識を得ている。

近世において急激に都市化した城下町は、武士とその家族及び商家と職人によって構成され、周辺の農山漁村との補完関係をもっていたことは、既に指摘されたことであるが、民俗的な事象において城下町社会の生活慣習や民間伝承が、いわゆる農村社会におけるそれと同一のものであるという関係性については必ずしもいえないように思う。

その理由として、まず伝承母体をみると、農村のようにムラ社会という単一の共同体とは異なり、都市にはいくつもの社会集団が内包されている故に、そこで行われる民俗はそれぞれの集団ごとの分立した習俗として展開されている。すなわち、都市では町会ごとの、同業者（会社や工場、商店といった職場をも含む）ごとの、年齢集団（婦人会・老人会など）ごとの、クラブ（伝統芸能や文化サークルを含む）ごとのといった、それぞれが相当数の人数を抱えて社会的に機能する集団があって、それへの加入儀礼や年中行事においては、個々の状況から工夫され生成された慣習によって運営されているからである。

ちなみに、金沢における伝承母体を葬式に集まった人の顔ぶれから検証すると、基本的には親族集団・地縁集団・同業者集団・宗教集団・文化集団の五類型に分類される伝承母体が想定される。

これらは都市に生活する人にとって、それぞれの集団とは個々に関わっている故に顔ぶれを異にし、生活時間を違えながらその集団に参加する性格のものであるから、集団はそれに参加している個人を基点にすると重層構造をともなっている<sup>(3)</sup>。

次に「都市生成の民俗」といった視点から検証すると、例えば年中行事において金沢の場合、藩政時代における武家と商家・職人の家では、例えば行事の形態においてそれぞれに相当の違いがあり、その違いを明治以降は家ごとの違いとして伝承してきた形跡がある。

商家のなかでも特にお茶屋とか料亭といった風俗関係の業種にはその違いが著しく、例えば芸妓のシンバナ（初めて店にでる芸子）の披露などの儀礼は、着飾った芸妓が町中を練り歩く華やかなものであり、都市の人々を印象づける慣行であった。

特にその時着る着物は黒のオズラシであり、内側には白とピンク色を重ね着するもので3色が使われていたが、今は黒と白の二つの重ねであるという。当時既に黒を晴れ着とする考え方は都市的な美意識であり、芸妓の世界が粹な世界であったことと深くかかわっていたと思われる。例えば、歌謡曲の「お富さん」の歌詞の文句にある「粹な黒塀 みこしの松」といった言葉に象徴される黒色の粹の感性なども、同じ性格の事象であろう。

また、昭和30年頃までこのお茶屋世界には、2月の節分の日に俗に「化け」と称した芸妓による仮装行事があり、これは芸妓がその日に限って髪を銀杏がえしから島田髷に結い直し、いわゆる町家のおかみさん姿に化けて客と遊ぶもので、丁度葬式のとくにすべての所作や着付けなどを通常の逆をもって行うことと類似しており、都市にはこのようにイレカワリという特殊なハレ感覚の現象があるように考えられる。

そして、この行事は金沢だけでなく熊本県人吉の茶屋遊びにおいても伝承されており、ある時期から全国的に広まった遊芸であったように見受けられる。

さらに商家でも縁起をかついだり商売繁盛を願うために、さまざまな俗信が信じられ、行事や民間信仰が行われている。

例えば金沢の野町広小路にある森紙店では、天狗信仰で著名な九万坊権現の信仰が重視され、

あるとき天狗の掛け軸を床の間に掛けていたところ隣家が火事になり、その天狗の掛け軸によって類焼を免れたといったエピソードから、天狗の絵像を床の間に掛け、毎日供え物をして拝み、天狗を大事にするようになったという。

また、この家では商売繁盛を祈願するため、夏土用、丑の日の正午に余所の家のアジサイの花枝を摘み取って、それを半紙にくるんで軒先に吊るすという習俗を行っているが、その際に「今日の日には紫陽花の金袋、むらさきものぞ我がものとしれ」と唱えて取らなければ効果がないという。ちなみに、このような紫陽花を切って軒に吊るす習俗は人吉でも「紫陽花の福袋」と称して行われ、これは基本的には「門守り」という都市的な民俗と考えられる。

ここで注目されるのは、自分の庭の紫陽花を取らずに余所の家の木でなければ効果がないという俗信であり、これは「あやかり」といった心意によるものであって、今日でも受験生が余所の家の表札を盗むことによって合格するとか、鼠小僧次郎吉の墓石を欠いてご利益を願うなどの共通した都市民俗的な心意現象とみることができる。<sup>(4)</sup>

また、都市で問題となるのは家の永続性に関する意識であって、農村に比べると家の永続観念や定住思考は希薄であり、また実際に家の盛衰が激しいことから住まいを変えることが多く、きわめて流動的である。

例えば、金沢の商家では、店をたたんで引っ越しする時に、必ず恵比寿や大黒の掛け軸を1本床の間に掛けて残していくもので、おそらく商売がうまくいかなかったために店をたたんだことの気後れが、そのような行為を生み習俗化したものと推察され、都市の流動的な現象の中から生成された民俗事象として注目される。

このように都市の社会では、家の行事といっても農村のように家族親族あるいは同族による祭祀といった宗教行事よりも、個人的な信仰による宗教活動が濃厚であり、家ごとに大きな違いがある。

九州は熊本県人吉市の場合、明治10年(1877)の西南の役の頃、西郷隆盛軍と官軍とが戦い人吉のマチが戦場と化したのが、その後マチの復興とともに九州各地からいろいろな商人や職人が移住したといわれ、その末裔の商家が目下老舗となってマチの商業活動の中心を占めている。

従って、人吉の旧家の年中行事を調べてみると、各家の先祖の出自によって行事の性格は異なり、その出自の地方の民俗が今日もお伝わっている。

例えば、筑後の八女地方から人吉に来て、5代にわたり椎茸や竹の子、ゼンマイ、お茶などを扱ってきた山産物問屋の立山商店では、盆行事に近く墓所へご先祖の霊を迎えに行くが、その折、家の当主は紋付袴姿で孫は浴衣を着用するという。そしてお精霊を迎える口上を述べた後、白い晒木綿の布にいくつかの結び玉をつくり、家族および精霊がそれに繋がって「お祖父さんお祖母さん、お足元が危ないですよ、お気を付け下さい」と述べながら家まで案内する。さらに家に着くと玄関には水を張った足洗いの桶が用意されていて、長旅の汚れを落とし、また座敷には既に出仏壇(組仏壇)が用意され、その前で早速に家族全員が迎え団子を食べお茶を飲むのが慣

例とされ、そして盆の期間中は朝昼晩の食事を供えて祖霊をもてなす儀礼を行っている。

これに対して、相良藩時代から御用商人で知られた河内屋一族の家系である益田呉服店では、盆の13日の夕方、家の裏の球磨川からご先祖の霊を招き、川岸に花筒を立て、提灯にてお精霊を迎えるもので、迎え方も先の立山商店とは異なり人吉の伝統的な民俗を伝えている。ちなみに盆の期間中はほぼ同じであるが、供える食事の内容も異なり、また益田家の16日は精霊船をつくって川から送り出すなど、この両家には明らかに他界観の違いがある。

このように人吉は他に薩摩から来た人、宮崎から来た人、天草から来た人、土佐鍛冶の技術をもった人といった具合に明治以降は様々な職種の人々が入り込んで、いわゆる出自を違える人々が混在するマチとして発達し、商業活動の近代化がはかられてきたと考えられる。

このことは内陸盆地に位置し、数多くの街道が交差する陸の十字路であったことから、もともと物資の流通の中継点としての機能をもったマチであることを意味し、それは他国のさまざまな情報や文化がつとに流入しつつ、マチの人々を刺激し影響を与えてきたという都市の成立条件をもとから内包していたことを印象づけている。<sup>(5)</sup>

ちなみに、柳田國男の『遠野物語』で著名な遠野市は、今日、昔話伝説の里としてあまりにも有名なマチとなったが、ここも元は南部支藩1万5千石の城下町であって、一方では街道が幾重にも交差する物資の中継点としての宿場町、あるいは1と6の付く日に市がたって賑やかなマチに変貌する市場町の性格を有していた。

このマチを調べてみると、ここでも家の盛衰は著しく、商家の移動や変遷は激しい。これは明治24年に大きな火災があって、その際に住民が入れ替わったものと見られるが、いずれにしろ経済的な問題や後継者の問題を含め、商家の系譜には複雑なものがある。

遠野在住の菊池照雄氏による『遠野物語をゆく』の著書によれば、遠野の人は世間話が好きで、「この情報、世間話への異常なまでの関心と執着は、遠野が交換経済の修羅場で、市場の論理が貫く地域であったこと、情報を相手より早く握った者が生きのびられるという競争社会だったからだ。」と記述されているのが注目され、ここではまさに都市状況の根本的な性格を表している。<sup>(6)</sup>

従って、これまで遠野を著名なものとしてきた昔話の集積の背景には、柳田がイメージした遠野の自然と人の暮らしとが密着したエコロジカルな世界という文学的評価よりは、およそロマンとは掛け離れた人間関係というか、生活情報のコミュニケーションの場としての役割としての世間話があったことにあらためて注目すべきであるように思える。

ここではとりあえず『遠野物語』の都市性の検証という再考の問題を提起するのみにとどめておくが、いずれ何らかの形で発表したいと思う。

すなわち、ここで強調しておきたいのは、日本の都市の民俗を考える場合に、いわゆる城下町あるいは在郷町を含めた町場を対象とし、前近代からの事象において何が都市的なのかを様々な民俗事例のなかから取り出し、その基盤となるものを整理し確認しておくべきではなかろうかということである。

### 3 もうひとつの生活技術論

この数年間、日本はバブル好景気のなかであって、各地でさまざまな村起こし・町起こしの現象が見られた。詳しいことはその道の専門家の意見を聞くことにして、民俗学の立場から、前述したように「経済済民の学」として何が言えるのであろうかということについて若干述べてみたい。

1992年7月～9月にかけて遠野市は「世界民話博」というイベントを行った。私もこの企画のなかの一つのシンポジウムに参加を余儀無くされたので、この事業の推移全体を見通す機会を得たが、終わってみればつくづく考えさせられることが多かった。

まず「民話」という言葉が、今日どれほどの力を持ち、人々の関心と呼ぶのかといった疑問である。それはおそらく民俗全般にわたって言える問題であるかもしれない。

柳田國男の『口承文芸史考』によれば、民話は単に「民間説話」の語彙を略したものと説明しているが、かつて全国各地に伝わっていた荒唐無稽な昔話伝説は、きわめて創造力豊かで身近なものであった。しかし、現在は伝承される話自体にエネルギーがすっかり失われていると考えられる。その理由として、次の三つの要因が考えられるであろう。

- (1) 民話が表す民俗的な世界が歴史に埋没したため、現代の世相に合わなくなってきていること。
- (2) 民話は説話文学なる学問に封じ込められてしまったこと。
- (3) さらに民話は戦後とみに文化財という扱われ方をしてきたために形式化し、血脈の通った活力あるものにならなくなったこと。

したがって、PR活動もさることながらもし現代を取り込もうとする民俗イベントを企画したならば、民話のもつ本質的な価値、すなわち都市化社会にも通用する世間話の持つエネルギーに着目し、例えば「世界“世間話”博」と銘打った性格付けでもって参加を呼び掛け、自由にワイワイガヤガヤと現代の「話」に打ち興じる場を演出した方が、より効果的ではなかったろうか。

この際敢えて言えば、この遠野に限らず、民俗が現代の人々の関心と呼ばず、また吸引力をもたないままエネルギーを失いつつあることに対して、行政当局や民間のイベントプランナー、町起こし推進者などはその実態を見つめ、状況を熟慮しておかなければならないように思われる。

近年、テレビのドキュメントにおいて全国各地の伝統的祭礼の実態をまとめたものが多く見られる。例えば諏訪神社の御柱祭り、小倉の祇園祭り、大阪府岸和田市の山車祭りといった大きな祭礼を見ていると、まず感じられるのは男性中心の、特に青壮年の屈強な男達がまるで何かに挑戦するかのよう、危険な激しい所作に一喜一憂する印象が強烈である。番組の解説にも、今なぜこのようなスリルを求めて男達が祭りに集まるのかといった現代のある種の情況、趨勢に関心を寄せてはいるが、様々な社会評論はともかくとして、これらはいずれも若者というか青壮年の

男性中心の祭りであることだけは確かである。

1978年10月、総合研究開発機構によって「もう一つの技術——先進国による可能性——」というシンポジウムが開催されたことがある。

これは経済学者のE・F・シューマッハが『人間復興の経済学——スモール・イズ・ビューティフル』という著書にて、「近代」という一つの巨大な時代の渦中で窒息しかかった「人間」に、本来の人間の姿をとりもどさなくてはならない、と一貫して述べてきた主張を受けて行われたもので、近代の巨大技術では捉えきれない「もう一つ」の技術が求められているのではないか、という問題意識に基づくものであった。

シンポジウムの中身については、ここでは詳しく述べられないが、シンポジウムにおける個々の発表や討議は大変興味深い内容である。<sup>(7)</sup>

ちなみに、ここでいう「もう一つの技術」とは、ハイ・テクノロジーや先端技術に対して中間技術 (Intermediate Technology) や適正技術 (Appropriate Technology), 代替技術 (Alternative Technology), 適正高度技術 (Appropriate Modern Technology) に区分されるものであって、このシンポジウムのなかで具体的に出された事例では、木炭高炉、太陽エネルギー、光合成の利用、有機農業、栽培漁業、風力エネルギー、廃棄物処理、生物活用等々といった対象であり、これらのいくつかは現在既に各地で進められている。

里深文彦氏の解説によれば、「もう一つの技術 (Alternative Technology)」というコンセプトを1973年に打ち出したのはロビン・クラークであり、彼はソフトな社会とかソフトなテクノロジーといった言葉を最初に言い出した人物であるという。そして、我々が今立脚している技術は、現代技術の社会からもう一つの技術の社会へという過渡期的なものであり、例えば「生態学的に健全」とか、「自然と融合している」とか、「自然によって設定された技術的限界」を持っているとかいう概念であるとしている。

すなわちこの時点で指摘された「人間と自然との共存」の課題は、今日叫ばれているエコロジー運動に、「地方の時代」の提言は町起こし運動へとつながった。そしてその後1990年5月に、NTTデータ通信システム科学研究所による「人間中心システムとテクノロジー」と題したシンポジウムが開催され、ここでは「もう一つの技術」(Alternative Technology) から「人間中心システム」(Anthropocentric Technology) へと、この種のヨーロッパを中心としたコンセプトの移行にともなう、新たな現代技術論の展開が見られたのである。<sup>(8)</sup>

つまり、このような推移における初期頃の「もう一つの技術」論には社会変革をも含めた論議の帰結があって、反原発運動の基本的思想ともなったが、いずれにしろこのような環境論を取り込んだ反巨大技術への考え方は、この先当分の間続くのであろう。

以上の現代における社会経済思想の状況を踏まえ、民俗学にとっての都市論を再考してみると、そこにはさまざまな可能性が考えられる。

前述した伝統的都市である金沢から抽出される都市の民俗とは、ある意味では中間技術であり

適正技術であって、いわば「もうひとつの生活技術」のストックとも言える。

この場合の「もうひとつ」とは既にある個別の民俗事象そのもの、すなわち何か一般的にある民俗事象とは違う種類の別の事象があるといったことを指し示すものではなく、現代の社会的趨勢つまり世の中の流れとは寧ろ逆行し、オリジナルな独自のライフスタイルを志向してゆこうとする無意識の情動であり、それをめぐる思考の回路の意味である。

これまで続けられてきた民俗事象のうちでも、特に出産や誕生、結婚、葬祭といった人生儀礼に関しては、そこで行われる地域性や伝統性が案外遅くまで変わらずに継承されてきた傾向があるが、しかし世の中が次第に豊かになると、これらの個人の人生の折り目に関わる儀礼はより一層ハレがましいものとなり、人々が惜しみなく費用をかける傾向が見出されると、すぐにもそれを扱う専門業者が立ち現れ、さまざまな様式の異なる儀礼が演出されてきたように見受けられる。

すなわち、このことが社会的傾向であって、これに流されずに独自に儀礼を守りつづける無意識の情動とか価値意識は、これまで考えられてきた単なる伝統性というものではなく、新たに現代社会に組み込まれても、なおかつ新たな魅力なり現代的意味を見出して位置づけられたものであるように感じられる。

例えば、現在も金沢ではごく普通に行われている民俗の一つとして、結婚式の前日に近所や親戚に配られる「五色生菓子」は、本来江戸初期より伝わるものであり、この5種類の菓子は「日月山海里」という森羅万象を象徴したものであって、五行思想に裏打ちされた色彩のコスモロジーを取り込んでいる。

さらに婚姻する両家の水を松竹梅の水引を施した青竹の筒に入れ、新嫁がカワラケの杯にその水を合わせて飲み干す「合わせ水」の習俗、或いは加賀友禅染でつくった「嫁暖簾」や「嫁袱紗」、紅白の餅を吸い物に入れた「落ち着きの餅」や五色彩の九谷焼の大皿に盛った「鯛の唐蒸し」などの地方色豊かな儀礼食など、これらはすべからず色彩を意識した装置であり、注文によって成り立つものであって、従ってきわめて都市的な性格を有した民俗なのである。<sup>(9)</sup>

また他には、春秋のお彼岸の深夜に、市中を流れる犀川と浅野川の流域に住む婦人たちが、老いの病が軽いことを祈願する「七つ橋渡り」の儀礼を今日復活しつつなお盛んに行っており、ここでは民間信仰の世界が根強く季節行事とからまって都市の人々の人生を勇気づけている。

さらに、屋内には目に鮮やかな朱色や群青色の壁を座敷に用い、他方屋外では雪の重みで松などの庭木が折れないよう縄を張って支える「雪吊り」を施し、その幾何学的文様はマチの景観までを変えてしまう風物詩ともいえるが、そこには現代にマッチした暮らしのなかの美意識が表現されていて、都市における人為的な造形文化のエネルギーを感じさせている。

すなわち、一方で変化の激しい社会情勢のなかで生活そのものを切磋琢磨しつづける金沢の人々は、このような伝統的に伝えられた生活技術としての民俗を、マンネリ化した生活のリズムにおける一服の清涼剤のようなアクションとして今もなお活用しているのである。

私は「日本の民俗」というのは基本的には日本人の自然観を反映したライフスタイルであり、暮らしの知恵の集積であると認識している。従って、都市生活には人工的な自然は必要であり、また生活リズムの基本は本よりナチュラルでなければならず、そのような民俗観は都市がより都市的になればなるほど農村よりも濃厚さを増しているような気がしている。

金沢のある住宅建設会社の経営者によれば、今40歳以上の施主の希望の大半は、一戸建てで和風庭付き、日本間を取り入れた和洋折衷の住宅プランであるという。

そして雪国であるから暖房への関心は高く、なかでも掘炬燵には根強い嗜好性があり、サラリーマンでも休日には畳敷の和室で炬燵に入り、カキヤマをぼろぼろ食べながらお茶を飲み、テレビを見るのが最も理想的な休息だという人が多いという。

また、別に能楽や謡、舞踊、長唄、小唄、茶道、華道、香道、短歌、俳句などの伝統芸能や文化活動への志向性が高く、参加者も多いのであって、このマチの特殊性を物語っている。

このような志向は金沢のみならず、これまで私が見てきた松江市、熊本市、人吉市、岐阜市、仙台市、弘前市、盛岡市といった旧城下町がもつ一つの傾向であって、巨大技術との共存関係を意識した人々の心の生活を維持する知恵であるようにさえ思われる。

すなわち、既に巨大技術に呑み込まれてしまった東京や大阪といった大都市（都会）へのアンチテーゼとして、より顕著に台頭してきた地方都市の、地方的、個性を強調する新たに注目される現象のように見受けられる。

目下、金沢ではかつて昭和38年に実施された住居表示事業によって、753町が214町に整理され消えてしまった旧町名を復活しようという運動が盛り上がっている。すなわち、これは「金沢らしさ」を取り戻すための文化活動の一幹として、金沢経済同友会が中心となり推進しているもので、生活の合理化によって失われた地名が本来持っている歴史文化を後世に残したいという保存運動なのである。

確かに、古い町名にはいくつかの悪弊もあった。例えば、その地域の人々しか分からないかもしれないが被差別地域を暗に示す町名や、当用漢字に出てこない判読の難しい漢字を使用した町名、都市化によって極端に住居が減少し町会が維持できなくなった町名、飛び地をかかえ地域が連続していない町名、新設した道路や用水によって分断された町名、学校の統合化によって学区制の線引きが難しくなった町名など、都市の目まぐるしい変化によって変えざるを得ない状況から整理が必要となった町名も数多くあった。

そして、他方、復活の動機ともなっている町名のもつ歴史文化への住民のこだわりや心情も重要なファクターとなり、町名によって「金沢らしさ」への復権を求めようとする動きは、伝統的都市がもつ現代的課題の一つであった。

しかし、実際に町名復活の理論的根拠というのは希薄であり、今ある運動の思想はややもすると危険な政治性をはらんでいることも確かである。従って、私自身は「町名を科学する」という理論的支柱をつくる作業が必要であるように思っている。

すなわち、ひとつひとつの町名が何を根拠として生み出されたものであるのか、そこに住む人々とどのように関わってきたのか、その町名のマチの暮らしの民俗とは何か、町名が占めるゾーンがどの程度に適正規模であるのか、そのゾーンが日常生活においてどのように機能するのか(道路、流通、コミュニケーション等において)、地域の発展に支障がないのか、観光資源との関わり等々、いくつかの視点から町名を検証しなければならないであろう。このような分析方法は、正に都市民俗学の一つの仕事である。

これまで調査してきた金沢には、明らかに中央権力に対抗した「反骨精神に支えられた土着の思想」があり、それが「もうひとつの生活技術」をつくらんとする精神的支柱となっている。そしてそのような反骨精神こそ、とりもなおさず地方都市が独自に生きるための思想的基盤となっているではなかろうか。

#### 4 都市民俗学と経世済民

柳田國男が意図した経世済民の学としての民俗学については、近年の民俗学はどれほどその効力を有しているのであろうか。

柳田が著した『山の人生』の冒頭に掲載された炭焼き男の殺人の話や親子心中で死に損なった女の話は強烈であり、柳田自身が「我々が空想で描いて見る世界よりも、隠れた現実の方が遙かに物深い」と述べているのが、印象的である。

また、柳田は『郷土生活の研究法』でも経世済民の学足らんとする民俗学の目的について触れているが、例えば「郷土研究の第一義は、平民の過去を知ることである。社会現前の実生活に横たわる疑問で、是まで色々と試みて未だ積み得たりと思われぬものを、此方面の知識によって、もしや或程度までは理解することが出来はしないかという、全く新しい一つの試みである」また、「私たちは学問が実用の僕となることを恥としていない。そうして自身にも既に人としての疑問があり、また能く世間の要求期待を感じている。差当りの論議には間に合わなくとも、他日必ず一度は国民を悩ますべしと思う問題を予測して、出来るものならそれをほぼ明らかにしておこうと企てている」などとも述べている。

ちなみに、世相史として代表的な『明治大正史・世相篇』の著作では、その第12章として「貧と病」と題した章を設け、真向からこの問題に言及しているのが注目されるであらう。<sup>(10)</sup>

柳田も自身を書斎派と称しているように、現実にあった世間の事件や問題については新聞記事を多く利用しているが、今日でも様々な社会問題は柳田の時代より遙かに増加しており、また内容も複雑な様相を見せていて、新聞や週刊誌、あるいはテレビなどのマスコミを通じて、我々はその概要を知ることができる。

なかでも、私が目下のところ特に関心があるのは新興宗教或いは迷信と家庭内トラブルについてである。

1981年（昭和56年）に、金沢市に隣接するある新興住宅地で、産後の肥立ちが悪くてノイローゼにかかった1人の若い主婦が、2人の子供を殺したという事件があった。原因は2人の子供が同じ月日に生まれたことから、口さがない近所の主婦たちから子供の運勢が悪いと言われ、思い悩んだ末の犯行と報道された悲しい事件であった。

同じく1988年（昭和63年）に金沢市効外のある農村で、マチのサラリーマンの家庭に育ち、農村に憧れて嫁いだ若い嫁が、家の跡継ぎの子供をなかなか生むことが出来ないことから、嫁ぎ先の大姑であるお婆さんが、余所から聞いてきた運勢占いの結果から家族に冷たくあしらわれるようになり、そんな運命を呪ってノイローゼとなって、果てには自殺してしまった。

一般にこうした事件の背景にはいくつもの因果関係があって、一言でその要因を決めることはできないが、しかし、現在の報道の範囲による情報からでも、多くの人にこのような運勢の占いか易といった人間の心を捉える非合理的な情報が求められ、科学文明が進めば進むほど、社会が複雑になればなるほど、情報が多くなればなるほど、人々にある種の不安の心理を引き起こさせ、逆に占いや迷信などの関心をより増大させる傾向にあるように思われる。

大衆社会でこのような非合理的なものが俗に信じられることを、迷信とか俗信という。例えばごく普通に「北枕で寝ると早く死ぬ」や「朝、茶柱が立つと縁起がよい」、「3人で写真を撮るとき真ん中に写った人が早く死ぬ」、「病気見舞いに鉢植えの花を持参してはならない」とか、「夜爪を切ると親の死に目にあえない」などは、日常的によく聞かれる迷信であろう。

広辞苑では、迷信とは間違っただけで信じられていること、あるいは人を迷いに導く信仰と説明されているが、実際には私たちの実生活に不都合な、害を及ぼす俗信を指すことが多く、それを殊さら強調する人の主観によるところが大きい。

文部省の1973年（昭和48年）に実施した「日本人の国民性」調査によると、何かを信仰しているが34%で、なかでも高い率を示す地域は、九州南部、北陸、中部地方で、仏教がその大半を占めている。

同じく1978年（昭和53年）の読売新聞による全国世論調査でも、運勢判断や縁起かつぎ、家の方位を気にする人が約80%に達している。さらにNHKの「日本人の意識」調査では、特に10代後半の若者層で、お守りやお札の力、奇跡、易や占いなどの実利的信仰を持つ傾向の強いことが示されている。

こうしてみると老若を問わず、日本人がいかに多様な宗教心に富む国民であるかを窺わせているが、そのような民俗性が迷信や俗信を今日なおも支えている土壌を形成しているのであろう。

さらに事例をあげると、ある都市近郊農村のサラリーマンに育った中学生が、友人との信頼関係を失ったことがきっかけで登校拒否を起こした。しかし、実際にはその背景に、その子の母親とその実母の新興宗教による家庭内トラブルが原因であった。

ちなみに、母親は結婚前から実母とともに新興宗教に入信しており、嫁いだ直後からまずその家の浄土真宗の仏壇にクレームをつけ、このような仏壇を放置しておけばいずれこの家に不幸が

訪れるとってきかなかつた。しかし、実際には彼女は熱心な信仰者であるから純粋に嫁ぎ先の家の不幸を心配しているのである。しかし、夫の両親はそれほど熱心な門徒ではなかつたけれど、先祖の位牌や仏壇を替えることだけは決して許さなかつた。

さらに、彼女は毎日曜日に実母と共に早朝から新興宗教の施設に出かけ、また様々な行事の参加も欠かすことなく、献金も多かつた。夫は妻のそんな所業に対しては信仰の自由を認め、既に諦めていたが、姑は息子の嫁のことを結婚前によく調べておけばよかつたとこぼすことしきりであり、いろんな不満が残っていた。

その家の長男である登校拒否をした中学生は、小学生の頃から母親の実家に行く度に、新興宗教の幹部でもあつた母親の実母から何かと説教され、勉強を怠るな、偉い人になれ、友人を大切にしろといった意味の教訓話を始終聞かされていたようである。

やがて、夫が仕事の都合で単身赴任するようになってから、母親のイライラが募り、知らず知らずのうちに子供に八つ当たりをしていたのであろう、成人に近づきつつある息子の爆発へと繋がり、登校拒否の行為を引き起こしてしまったのである。

このような事象は今全国のどこにでもある家庭内トラブルである。そしてトラブルの原因はと言えば、新興宗教に問題があるのか、それを信じる人と信じない人との間に生じる心のギャップが問題なのか、旧習による弊害なのか、社会の抑圧に抗し切れない人間の弱さの露呈なのか、その他様々な要因があるであろう。

このようなわずか一つの登校拒否事件の聞き取り例においても、社会学的、民俗学的な対象となるキーワードをあげるとするならば、都市近郊農村・サラリーマン家庭・新興宗教・母と娘・嫁と姑の関係・婚姻関係・家・真宗・仏壇・門徒・先祖の位牌・日曜日の行事・献金・婚前調査・嫁の里・実家の母・教訓譚・単身赴任・登校といった数々のタームがあり、事件の裏にはこれらの個々の問題が複雑に絡み合っているように思われる。

東京近郊のある市の市街地からほど遠くないある小さな農村では、それほど多くない戸数の全戸がある新興宗教に宗旨替えをしてしまったため、ムラの鎮守社は今や誰も祀ることなく管理されずに放置され、社殿は朽ち果て崩壊寸前にて、境内や参道まで荒れ放題の見るも無残な神社となつてしまった。

このような現象も、現在、日本の各地で次々と起こり始めているように考えられる。

近年、「ぼっくり死」を望む老人が増え、各地でその願望を祈願する社寺参詣旅行が密かなブームを呼んでいることを見聞きする。都市に住む孤独な老人を対象とした「ぼっくり死」を適える寺院への老人ツアー企画や特別列車があり、このようなブームの陰には何か寒々としたものを覚える。

そして、今、なぜ「ぼっくり死」なのか、これは新興宗教なのかといった問題を考えてみると、次のようなことが言えそうである。

第1に、1967年(昭和42年)頃から流行語ともなつた核家族化の現象によって、都市や過疎地

農村に取り残された独り暮らしの老人が、急速に増えたこと。

第2に、1980年（昭和55年）に流行語となった「老人よ、墓石を抱け」とか「寝る前にきちんと締めよう親の首」といったブラック・ジョークにみられるような老人軽視の風潮が社会に浸透していったこと。

第3に、複雑化する社会や多様化する現代の価値観に、およそついていけない老人たちの足元からじわじわと沸き上がる不安やいらだちが、逆にマイナーな心理へと向かわせていること。

第4に、かつて相互扶助を前提とした村落共同体の崩壊といった現象も、老人のような弱者にとっては、救い難い社会的な不安心理を助長している点などが、因果関係としてあげられるであろう。

これらの「ぼっくり死」願望の対象となる神仏として多いのは観音信仰であり、この信仰は本来雑多な願いや現世利益的な宗教性のあるところから、現代の宗教現象を生み出す可能性は高いように思われる。

しかし、ひと思いに死んだほうがまだ、といった日本人の刹那的な死生観は日本の中世の時代からのものだけに、ここではそれほど目新しい祈願であるとは思えない。そうすると、このゲームの底には戦時下の兵士のような「死にがい」を今日見出せない老人たちが、社会から強いて遠ざかり、ひたすら安楽死のみを願望するという不毛の人生観を抱くところに、現代社会の深い裂け目があるように思えてならない。

ちなみに、柳田國男は『郷土生活の研究法』のなかで、いみじくも「今の農村の動揺苦悶の底にも、善し悪しは別として、古い信仰の名残のあることは、これを認めずにはいられぬであろう。切って棄てるにせよ、はた堅く守って放たないにせよ、それを確かめるためには我々の通ってきた過程を知っておらねばならぬ」と昭和10年の頃の学問救世の意義を強調している。

都市民俗学が仮に現代民俗学の位置づけをすることができるならば、まさにこのような現代の社会的事象のなかで見え隠れしている民俗的要素の「我々が通ってきた過程」、すなわち民俗の変容を知ること、その目的があるであろう。

## 註

- (1) 詳しくは田中喜男『金沢町人の世界』国書刊行会、1988年刊を参照されたい。
- (2) 竹田曉州「都市化の中の世相解説史学」(『季刊柳田國男研究』8号)白鯨社、1975年刊所収。
- (3) 詳しくは拙著『都市民俗学—都市のフォークソサエティー』名著出版、1990年刊を参照されたい。
- (4) 高桑守史「儀礼的盗みとムラ」(日本民俗文化大系 8巻『村と村人』所収)小学館、1984年刊。
- (5) これに関連した著書として米山俊直『小盆地宇宙論と日本文化』岩波書店、1989年刊があるので参照されたい。
- (6) 菊池照雄著『遠野物語をゆく』泉社、1991年刊。
- (7) 詳しくはこのシンポジウムを記録刊行した、総合研究開発機構編『もう一つの技術—巨大技術の行き詰まりをどう克服するか—』学陽書房、1979年刊を参照されたい。
- (8) 詳しくは人間中心システム研究会事務局編集『人間中心NEWSLETTER』NTTデータ通信株式会社システム科学研究所発行のものを参照されたい。特に里深文彦「ATから人間中心システムへ」と題した講演要旨が注目された。

- (9) 都市における色彩文化の問題については近日刊行予定の拙著『色彩のフォークローア—都市のなかの基層感覚—』雄山閣出版刊、にて詳しく論じたので、参照されたい。
- (10) 柳田國男『山の人生』『郷土生活の研究法』『明治大正史・世相篇』はいずれも筑摩書房刊『定本柳田國男集』4巻・24巻・25巻より引用した。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

Folklore as "Discussion of Alternative Technology in Life Style"  
—Urban Folklore, Administration and Relief—

KOBAYASHI Tadao

Since the arrival of the Modern Age, the urban environment has created a new folklore. Let us provisionally call it the "handing down of the urban life style"; examples can be seen in the "*Wari-ike* (*Wari-ido*) and "*Tainai-kuguri*" of Kanazawa. Urban folklore encounters problems in that the parent body of tradition is independent, which is different from the *mura* (village) society, because of the frequent moves by urban residents, and the ups and downs of businesses; consequently, folklore phenomena, such as annual events, popular beliefs, superstitions, etc., have developed individually. Therefore, if the city is an economic battlefield steeped in the logic of the marketplace, it becomes important to obtain information and gossip earlier than others.

Since the 1970s, E. F. Shumach's "Alternative Technology", which cannot be understood through modern mammoth technology has ruled the concept in Europe. Applying this to urban folklore, we maybe able to grope for unigue life style (life technology) in local towns.

A mere town-revitalization campaign has problems. For example, in a campaign to restore town names lost through the rationalization of life style, there is a problem if the attitude to study the the town names scientifically is lacking. Urban folklore may have a part to play in the sense of searching for changes in folklore customs.

Recent newspaper articles report on infanticides, children who refuse to go to school, violence in the home, etc. As family incidents occurring in cities and suburban farming villages. Many of these incidents are caused by troubles related to superstitions or newly-established religious cults. Furthermore, the popular tendency among the aged to wish for a "sudden death" should be seen against the background of confusion with regard to the mammoth technological society, mental destrutction of weak people who cannot resist the pressures of society, or the collapse of the communal society.

It is doubtful how useful today's folklore is as a study of administration and relief as intended by YANAGITA Kunio. The more artificial a city becomes, the more people search for a natural environment and rhythm of life. Folklore should always answer such social demands.